

粘土板に刻まれた文学

——『ギルガメシュ叙事詩』の場合

月本昭男

1 楔形文字の発達

メソポタミアに都市国家文明を築いたシュメル人が最初に体系的な文字を使用したのは、紀元前三二〇〇年頃のことである。後に楔形文字へと発達するこの文字は、元来、事物を象った絵文字であった。わずかに遅れて、エジプトでもヒエログリフと呼ばれる象形文字が用いられはじめるが、文字使用という発想はシュメル人から受け継いだといわれる。

比較的最近の考古学的発見は、このシュメル絵文字に長い前史があったことを明ら

かにした。すなわち、メソポタミアでは前七〇〇〇年頃から食料品や家畜の管理に用いられていた幾何学形（球、立方体、三角錐など）の小粘土塊が、前四千年紀になると、管理の対象になる家畜や物品を象ったそれに変化した。これをトークン（token）と呼ぶ。トークンは管理する事物の数だけ作られねばならなかったが、これを平面的な絵文字に変え、数を表す記号とともに記すことにより、一枚の粘土板に必要な管理情報がすべて盛りられることになる。こうしてシュメル絵文字（Sumerian pictogram）が成立したのである。さらに、この絵文字を縦・横・斜の線だけを用いて簡略化したものが楔形文字である。楔形（cuneiform）と呼ぶのは、生乾きの粘土板に葦の尖筆を斜に押しでける線が楔（Lat. cuneus）の形を呈するからである。

前三千年紀になると、楔形文字は様々な分野で用いられ、経済上の記録の他にも、売買、貸借、縁組などの契約や裁判記録、公私にわたる書簡類などが粘土板に記され、支配者は戦勝や神殿建立などの事績を競って碑文に刻ませた。なかでも神殿建立奉獻碑文は、当時のメソポタミア文明社会において宗教がきわめて重要な役割を果たしていたことを示している。シュメル初期王朝時代Ⅲ期（前二五〇〇頃）には、神話、神々讃歌、神名表などが残された。また、文学作品と呼びうる文書は前三千年紀末葉のシュメル都市国家ラガシュの君主であったグデア（前二一四〇—二二〇年頃）の円筒碑文である。^{*1}

*1 立教大学文学部図



銘文入粘土くぎ（次頁参照）

- 1 米 組 以 無
- 2 以 以 以 以
- 3 米 其 以 以
- 4 以 以 以 以
- 5 以 以 以 以
- 6 以 以 以 以
- 7 以 以 以 以
以 以
- 8 以 以 以 以
- 9 以 以 以 以
- 10 以 以 以 以
- 11 以 以 以 以
以 以

碑文の手書きコピー（月本写）

書館にはこのグデアが奉納した碑文が所蔵されている。本書二三四頁参照。

新シュメル時代の都市国家ラガシュ

第7代目の君主グデア（前 2144-2124 頃）の奉納碑文入り粘土釘

読み方	翻訳
1. ^d Nin-gír-su	1-3: エンリル（最高神）の力強き
2. ur-sag-kal-ga	勇士ニンギルス（ラガシュの都市
3. ^d En-líl-lá-ra	神）のために
4. Gù-dé-a	4-7: 都市ラガシュの君主である
5. énsi	グデアは必要なものを目に見える
6. Lagaš ^{ki} -ke ₄	形に仕上げた。
7. níg-du ₇ -e pa mu-na-è	
8. é-ninnu-ánzu	8-11: 彼（グデア）は彼（ニンギル
9. ^{mušen} bábbar-ra-ni	ス）のためにエ・ニンヌ神殿と輝
10. mu-na-dù	くアンズー（獅子頭鷲）像を造り、
11. ki-bé mu-na-gi ₄	これを修復した。

この碑文付粘土釘はニンギルス神に捧げられた神殿の壁に奉納碑文として埋め込まれたものである。グデアはこのような奉納碑文を数多く刻ませたが、他のシュメルの君主たちが刻ませたような戦勝碑文は一点も残さず、自らを「王」と名乗ることもない信仰深い敬虔な君主であった。

標題および責任表示 : [Gudea's clay cone with a Sumerian inscription]

出版・頒布事項 : [Iraq] : [s.n.] , [B.C.2060?]

形態事項 : 1 piece of clay cone ; 13 x 6 cm. in case, 12 x 12 x 23 cm.

注記 : Sumerian inscription dedicated to Ningirsu, the patron deity of the city of Ghirsu

注記 : Cuneiform character

注記 : Production area (assumption): Ghirsu (Lagash, Mesopotamia)

本文言語コード : シュメール

所蔵 : 人文科学系図書館 NDC: 227.3||G 91 資料 ID : 52114273

2 書記の学校と楔形文字文化の盛衰

このようなメソポタミアの文字文化の担い手は、前二〇〇〇年前後を境にして、シュメル人からセム系民族に、言語は膠着語のシュメル語から屈折語のセム系言語アッカド語（バビロニア語とアッシリア語からなる東セム語の総称）にとつて代わられる。それまでシュメル文明が栄えた両河下流域から中流域にかけてセム系の支配者たちが覇権を競い、前一八世紀後半には、法典で有名なバビロニア王のハンムラビがメソポタミア地域を統一した。こうして、シュメル人が考案した文字が言語体系の異なるアッカド語の表記に用いられ、各文字は訓読みと音読みの双方に用いられるようになる（万葉仮名に似る）。同時に、それまでのシュメル語は、文語として継承され、シュメル語の文学作品や宗教文書が後代に伝えられたのである（ヨーロッパにおけるラテン語に似る）。

このような文字文化はごく一部の識字層によって担われた。文字数にして五〇〇を超え、その大半が文脈によって読み方が変わる楔形文字の学習は容易でなく、書記法を習得した者のみが文字文化の直接の担い手となりえたのである。文字の習得は「書板の家（E. DUB-BA = bit puppi）」と呼ばれた学校で行われた。古バビロニア時代に学校生

活の一面を皮肉をこめて描いたシュメル語の作品が残されている。『学校時代』と名づけられたこの作品は次のような問答体ではじまる。^{*2}

生徒よ、「若き日に」どこに通ったのかね？

私は学校に通いました。

学校では何をしたのかね？

私は書板を読み、昼食を食べ、書板を準備してそれに書き、それを仕上げました。

そして、私に模範書板が渡され、また練習用の書板が渡され、学校が終ると、家に帰りました。家に入ると、父親が坐っており、私は父に練習用の書板を説明し、それを読んで聞かせますと、彼は喜びました。……翌朝、私は朝早く起床し、母親に「弁当を二つ用意してください、学校に行きます」と言いました。

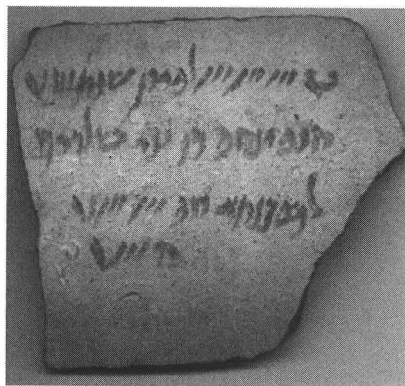
ところが、この生徒は遅刻したうえに、授業でも間違いを繰り返したために、担当教師から冷たくあしらわれる。そこで彼は父親に頼んで教師を自宅に招待し、贈物をもって歓待する。すると、教師はこの生徒への態度を一転させて、書記術をしつかり学ぶように励ました、というのである。

*2 S. N. Kramer, *Schooldays: A Sumerian Composition relating to the Education of a Scribe*, Philadelphia: University Museum, 1949. シュメルの学校に ついては、やはり、S. N. Kramer, *The Sumerians, their History, Culture, and Character*, Chicago & London: The University of Chicago Press, 1963, pp. 229-248 参照。

メソポタミアの学校は、文字の読み書きを習わせるだけでなく、神話や文学、讃歌や祈禱、格言やト占など、様々な文書に通じさせ、会計帳簿や法律文書の作成などの実用的訓練を施す場所であった。これらすべてを修得した者は「書記 (DUB-SAR = *ḫaradū*)」となり、より優れた書記は国家官僚として、あるいは国家護持の神殿付祭司として、一種の門閥を形成した。そうした書記が残したおびただしい数の粘土板文書が都市遺跡に残る文書庫から発見される。現在に知られる最大の文書庫は新アッシリアの主都ニネヴェの図書館（前七世紀）である。そこからは、断片まで含めると数万点に及ぶ文書群が出土した。書記の伝統はまた地方都市の地域社会にも連綿と継承され、メソポタミアの地方都市遺跡からも数多くの文書庫が検出されている。

メソポタミアで発達した楔形文字は、エブラ文書が示すように、前三千年紀中葉にはシリアにも伝播している。前二千年紀はじめには、アナトリアにおけるアッシリア商人たちが商取り引きに楔形文書を用いており、アナトリアに一大帝国を興したヒッタイト人もまたバビロニアの楔形文字を受容した。前二千年紀後半、楔形文字が西アジア全域に流布したことは、エジプトのアマルナで発見された楔形文書（「アマルナ文書」）が示している。当時、西アジアの共通語 (*Lingua franca*) は楔形文字で記されるバビロニア語であった。ところが、前一千年紀には、楔形文字の使用はほぼアッシリアと

バビロニアに限られる。西方できわめて簡便なアルファベット文字が広く普及しはじめたからである。そして、アッシリアが滅亡し、バビロニアがペルシアに征服される前一千年紀中葉以降、楔形文字文化は衰退の一途を辿りはじめる。ペルシア（アケメネス朝）の公用語はアルファベットで記すアラム語であった。続くセレウコス朝時代（前三世紀）に、一時期、南メソポタミアの都市ウルクで楔形文字文化復興運動（楔形文書ルネッサンス）も興ったが、アルファベットに傾く時代の趨勢は覆らなかった。こうして、シュメール時代以来、ほぼ三千年にわたって栄えたメソポタミアの楔形文字文化は消滅した。



土器片にアルファベット文字で記された記録。

前4世紀、南パレスチナ出土（立教大学文学部図書館所蔵）。

- (1) b 29 lsywn šnt 5
- (2) qwsynhm mn bny b'lyrm
- (3) lmsknt' H 8
- (4) Q 4

- (1) 第5年、シワンの月、29日に、
- (2) カウスイエナヘムがバアルイエラムの息子たちから
- (3) マスカンタに：小麦8セア
- (4) 4カブ（を渡した）。

3 楔形文書の伝承

楔形文書は基本的に粘土板に刻まれ、重要な文書は焼き固められて保存されるために、破損することはあつても、遺跡の地中に埋もれて今日まで残されることになった。当時の社会生活のあらゆる分野に及ぶこれらの文書は、その内容により、一回的なものと繰り返し書き写されるものに区分できる。経済上の記録や行政文書、王碑文や条約、公私にわたる書簡類などは前者であり、文学作品（神話、叙事詩、知恵文学、他）や宗教文書（儀礼、讃歌、神託、卜占、他）、医術文書や科学文書などは後者に属する。後者の場合、地域をこえて流布し、時代をこえて伝えられたがゆえに、しばしば同一文書が複数の遺跡の異なる時代層から発見されることになる。それによって、これらの文書の成立や伝承過程が明らかにされることも稀ではない。

たとえば、愛と戦いの女神イシュタルが冥界に囚われる神話『イシュタルの冥界下り』は、シュメル語神話『イナンナの冥界下り』の発見により、そのアッカド語翻訳版であったことが判明した。なかには、疫病神エラによるバビロン破壊を物語る『エラの神話』のように、前一千年紀になって作成された作品もあるが、文学作品や宗教

文書の多くは、古バビロニア時代（前二千年紀前半）に成立し、繰り返し書写されて、前一千年紀まで伝えられた。人間創造から洪水物語にいたる太古の神話を記す『アトラ・ハシース』は、これまで、古バビロニア版（前二千年紀前半）、新アッシリア版（前一千年紀中葉）、新バビロニア版（前三世紀）が知られている。こうした作品は、ゆうに一千年をこえる伝承の過程で、様々な編纂や改編の作業が施された。文学作品や宗教文書のなかには、中期バビロニア時代（前一一五〇年前後）に組織だった編纂作業が施されたものが少なくない。この作業は「標準化（standardization）」と呼ばれる。儀礼文書やト占文書の多くは、この時期、その主題や目的に沿ってまとめられ、様々なシリーズ作品として前一千年紀に伝えられたのである。

古代メソポタミア文学を代表する『ギルガメシュ叙事詩』もまたそのようにして伝承された作品である。前述したニネヴェエの図書館から出土した文書群のなかに見い出された『ギルガメシュ叙事詩』は、当初、ヨーロッパに伝えられる英雄物語と同様、吟遊詩人によって朗唱された作品と考えられていたが、その後、様々な遺跡からその断片が発見されるに及んで、これが書き伝えられ、読み継がれた文学作品であることが明らかになった。^{*3}

*3 拙訳『ギルガメシュ叙事詩』（岩波書店、初版一九九六年）。その後、刊行

4 『ギルガメシユ叙事詩』の成立と流布

王ギルガメシユ (Gilgamesh) を主人公とするアツカド語の『ギルガメシユ叙事詩』が文学作品として最初に成立したのは古バビロニア時代(前一八〇〇年前後)であり、最も新しい写本は、前述したウルク楔形文書ルネッサンス時期(前三世紀)のものである。したがって、この叙事詩は、じつに一五〇〇年にわたって書き継がれ、読み伝えられたことになる。『ギルガメシユ叙事詩』がメソポタミア文学を代表する作品とみなされる理由もそこにある。

ギルガメシユは元来ビルガメシユ (Bilgamesh) と呼ばれ、シュメル初期王朝時代Ⅲ期(前二六〇〇年頃)に都市国家ウルクの王として実在した人物であったとみられる。彼自身が刻ませた碑文資料は知られていないけれども、彼の名はシュメル王名表に息子の名とともに記されるだけでなく、彼にまつわるシュメル語伝承に登場する人物の実在が碑文から確認されるからである。ギルガメシユに言及する最古の文書は前二四五〇年頃にシュメル都市シュルツパクで記された神名表である。この時期、ギルガメシユはすでに神格化されていた。その一方で、彼をめぐる数々の物語も形成され、それらは

された『ギルガメシユ叙事詩』の主なテキスト、翻訳、研究書は以下の通り。

- S. Parpola, *The Standard Babylonian Epic of Gilgamesh*, Helsinki: The Neo-Assyrian Text Corpus Project, 1997
- J. Maier, ed., *Gilgamesh: A Reader*, Wauconda: Bolchazy-Carducci Publishers, 1997
- B. Foster, *The Epic of Gilgamesh*, New York/London: W. W. Norton & Company, 2001
- A. R. George, *The Babylonian Gilgamesh Epic I, II*, New York: Oxford Univ. Press, 2003
- S. M. Maul, *Das Gilgamesch-Epos*, München: C. H. Beck, 2005
- J. Aizze and N. Weeks, eds., *Gilgamesh and the World of Assyria*, Leuven: Peeters, 2007

前二千年紀前半のシュメル語文書に残されている。そのうち内容が明らかかな作品は次の五点である。^{*5}

『ギルガメシユとアツカ』

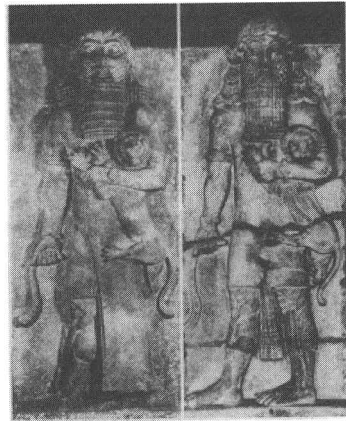
『ギルガメシユとフワワ』

『ギルガメシユ、エンキドゥ、天牛』

『ギルガメシユ、エンキドゥ、冥界』

『ギルガメシユの死』

最初の『ギルガメシユとアツカ』は、ウルクに攻撃を仕掛けるキシユの軍隊をギルガメシユが迎え撃ち、キシユの王アツカを捕らえるが、最後にはアツカを解放してキシユに帰らせた、という歴史物語。アツカは実在の王であった。次の二つは一種の英雄物語である。『ギルガメシユとフワワ』では、ギルガメシユとその「僕」エンキドゥが「生者の山」に遠征し、怪物フワワの首を刎ね、これを神エンリルの前に供える。『ギルガメシユ、エンキドゥ、天牛』では、ギルガメシユに憤慨した女神イナンナの要請



ライオンを抱く二体の英雄像。新アッシリアの王サルゴン二世（前721-705年）が造営したドウル・シャルキン（今日のコルサバード）の宮殿の入口から出土。ギルガメシユとエンキドゥを髣髴させる。向って左がギルガメシユか（ルーブル美術館蔵）。

*4 上掲拙訳の解説、二九七―二九九頁参照。

*5 上掲拙訳の解説、二九二―二九六頁参照。但し、『ギルガメシユの死』については、さらに A. Cavigneux et F. N. H. Al-Rawi, *Gilgamesh et la mort: textes de Tell Haddad VI avec un appendice sur les*

により、天から下された「天牛」をギルガメシュとエンキドゥがしとめてしまう。それ

れに対して、最後の二つは、題名が示すように、どちらも冥界に関わる作品である。

もともと異なる二つの物語を結びつけた作品『ギルガメシュ、エンキドゥ、冥界』の前半部には、女神イナンナが大切にしていた庭木ハラブ（HALAB）に棲みついた蛇と悪霊と猛鳥を追い払ってくれたギルガメシュにその幹でブックとメック（木製の球と打撃棒）を作って贈るまでが物語られる。後半部では、そのブックとメックを地下の冥界に落してしまったギルガメシュのために冥界に下って、冥界に囚われた「僕」エンキドゥが知恵の神エンキの計らいで再び地上に戻り、ギルガメシュの問いに答えて冥界の模様を語って聞かせることになる。最後の『ギルガメシュの死』は、比類なき王権を付与されたが、永遠の生命は許されなかったギルガメシュの盛大な葬礼と冥界下りの模様を伝えている。

ギルガメシュをめぐるこれらの作品は古バビロニア時代（前二千年紀前半）の書板を通して今日に伝えられる。この時代、さらに、これらのシユメル語諸伝承をふまえ、アッカド語の作品『ギルガメシュ叙事詩』がまとめあげられた。とくに『ギルガメシュとフワワ』と『ギルガメシュ、エンキドゥ、天牛』の二つの作品はアッカド語に変えられ、物語に組み込まれた。当初、この作品は『他の王たちにまさる者』と題されており、

textes funéraires sumériens,
Groningen: Spx, 2000 参照。

これまでに発見された複数の書板から推察されるように、そこにはすでに前一千年紀の粘土板からその全貌が明らかになる『ギルガメシュ叙事詩』の基本が整えられていたのである。

『ギルガメシュ叙事詩』が西アジアのほぼ全域に流布するのは前二千年紀後半である。ヒッタイトの主都ボガズキョイから出土する粘土板文書のなかにアッカド語版とヒッタイト語翻訳版が存在する。パレステイナのメギド遺跡からも、シリアの都市国家エマルの遺跡からもその一部が発見されている。フリ語版やエラム語版の存在も知られている。だが、これらは断片的なかたちでしか今日に伝わっていない。物語のほぼ全貌がわかるのは、新アッシリア時代の粘土板(前七〇〇年頃)をとおしてである。ニネヴェエの図書館には、四点の『ギルガメシュ叙事詩』が収められていたことが判明している。標準版と呼び習わすこの版は、古バビロニア版の増補改訂版といつてよく、写本伝承上の検証から、前一二〇〇年頃に成立したと考えられる。すでに触れたように、この標準版の最も新しい写本が前三世紀のものである。その後は、紀元前後のユダヤ教の一派が残した死海文書にギルガメシュの名がみられ、紀元後のギリシア文献にもギルガメシュへの言及はみられるが、物語自体が伝わっていた確かな形跡はない。

5 標準版『ギルガメシュ叙事詩』の粗筋

ニネヴェの図書館に所蔵されていた標準版『ギルガメシュ叙事詩』は一二の書版からなるが、第一二の書版は、後に述べるように、新アッシリア時代の二次的付加であり、物語自体は第一一書版で終わっている。各書版は六欄に区切られ、一欄は五〇行前後を数える。したがって、標準版『ギルガメシュ叙事詩』は、元来、三三〇〇行ほどの作品であった。現在に残る行数はそれよりはるかに少ないが、それでも、物語の全貌はほぼ明らかである。以下、各書版に沿って、まずは物語の粗筋を追ってみよう。

第一の書版

「深淵を覗きみた人」ウルクの王ギルガメシュを讚える序詩をもってはじまる。だが、ウルクの市民は彼の横暴さに困惑し、ウルクの都市神アヌに訴える。アヌは彼を懲らしめるために、野人エンキドゥを創造させた。当初、荒野において獣同様の生活を送っていたエンキドゥのことを聞き知ったギルガメシュは、娼婦シヤムハトを荒野に遣わした。彼女と交わるなかで、エンキドゥは人間の生を知る。ウルクでは、ギルガメシュ

が彼の夢を見る。

第二の書板

シヤムハトに連れられて、荒野からウルクの町にやって来たエンキドゥは、「国の広場」でギルガメシュと格闘を演じる。それは建物の「敷居が震え、壁が揺れる」ほどであったが、二人は勝負のつかぬまま疲れ果て、やがて互いを認めあい、友情で結ばれる。「香柏の森」の怪物フンババ退治を提案するギルガメシュに、エンキドゥはフンババの恐ろしさを語り、これを制止しようとするが、ギルガメシュは武器を作らせ、遠征の準備にとりかかる。

第三の書板

「香柏の森」への遠征の決意を語るギルガメシュは、ウルクの長老たちから祝福を受け、母ニンスンには太陽神シヤマシユからの加護を祈ってもらう。こうして、ギルガメシュとエンキドゥは「香柏の森」へと出立する。

第四の書板



フンババを撃つギルガメシュ(左)とエンキドゥ。ルリスタンの青銅製長杯の打ち出し文様(前二千年紀後半。ベルリン、原始・初期歴史時代美術館蔵)。

遠征の途中、二人は四度の休息を取り、そのたびごとに太陽神を祀り、ギルガメシュは夢を見る。エンキドゥはギルガメシュの四回目の夢をフンババ征服の予示と解し、勇気を得て「香柏の森」に近づくが、フンババの恐ろしい叫びのゆえに、ギルガメシュが恐怖に囚われる。今度は、エンキドゥがギルガメシュを激励し、「香柏の森」に到着する。

第五の書板

「香柏の森」に到着した二人の前にフンババが立ちはだかるが、エンキドゥの鼓舞により、二人は力を合わせて、フンババを制圧する。エンキドゥは助命を願うフンババの殺害を主張し、ついにフンババは首を刎ねられる（この部分の描写は欠損）。こうして二人は香柏（＝レバノン杉）を伐採し、これを筏に組んで、ユーフラテス川を下り、シュメルの宗教都市ニツプルに運ぶ。

第六の書板

衣冠を整えウルクに凱旋するギルガメシュに愛と戦いの女神イシュタルが想いを抱き、あからさまに言い寄る



フンババを撃つギルガメシュ（左）とエンキドゥ。新アッシリア時代の円筒印章（ベルリン、原始・初期歴史時代美術館蔵）。

が、ギルガメシユは男に不実なこの女神をなじりとばす。怒ったイシュタルは、ギルガメシユへの懲らしめとして狂暴な「天牛」を天からウルクに下すが、ギルガメシユはエンキドゥと力を合わせ「天牛」をしとめてしまう。職人たちは「天牛」の角の大きさに驚き、女たちはギルガメシユを讃える。しかし、エンキドゥは不吉な夢を見る。

第七の書板

神々の世界では、フンババを殺害し、「天牛」をし

とめたギルガメシユとエンキドゥに対する報いが相談され、最終的にエンキドゥの死が定められる（この件りはヒッタイト語版による）。これを知ったエンキドゥは、かつて自分を荒野からウルクに導いた娼婦を呪う。しかし、冥界の夢をみてから、死の病に冒される（エンキドゥが死ぬ場面は欠損）。

第八の書板

エンキドゥの死を悼むギルガメシユが長い哀悼の歌を語り、手厚い葬りを執り行う（葬礼の描写部分は多くが欠損）。



愛と戦いの女神イシュタル。ライオンはイシュタルの侍獣。古アッカド時代の円筒印章（シカゴ・オリエント研究所蔵）。

第九の書板

友エンキドウの死を目のあたりにしたギルガメシュは死の恐怖にとりつかれ、永生を求めて旅に出る。ウトナピシユティム（「生命を見た者」の意）に会って、「死と生の秘密」を聞き出すためであった。途中、太陽が昇る双子の山マーシユで「蠍人間」に出会い、長い暗黒をくぐり抜け、憔悴したギルガメシュは、ようやくにして、宝石や果樹に輝く海辺に到達する。

第一〇の書板

ギルガメシュは海辺で「酌婦」シドウリに出会う。彼女はウトナピシユティムのもとに行くには舟師ウルシャナビの案内で「死の海」を渡らねばならない、とギルガメシュに告げる。「死の海」を一人で渡ろうとして失敗したギルガメシュはウルシャナビの指示を仰ぎ、特別な權を作って、ウトナピシユティムのもとに辿り着く。ウトナピシユティムは、人間は誰しも死を避け得ない、とギルガメシュに諭す。

第一一の書板

それでも諦めないギルガメシュに、ウトナピシユティムはみず



王の前で奥処を露にする女神。ギルガメシュを誘惑するイシュタルを連想させる。前1700年頃のシリア型円筒印章（ニューヨーク、P. モーガン図書館蔵）。

からが神々に列せられた次第を語って聞かせる。太古の昔に神々が人間を滅ぼそうとして地上に大洪水を下したとき、あらかじめそれを知らされた彼だけは、方船はこぶねを造って生命あるものの種しゅを生き延びさせ、洪水後、不死の生命を与えられた、というのである。その後、ウトナピシテームはギルガメシュに七日間不眠の試練を課し、これに耐えられなかったギルガメシュを追い返そうとするが、妻の同情溢れる言葉に動かされ、ギルガメシュに「若返りの草」のありかを教える。この草を手にしたギルガメシュは喜び勇んでウルクに戻ろうとするが、途中、泉で身を清めている間に蛇がこの草を持ち去ってしまう。物語は、ギルガメシュが失意のうちにウルクに戻ったところで終わっている。その後、冒頭のギルガメ



The face of Humbaba, the giant of the Pine Forest.

香柏の森の「守り手」フンババの面。古バビロニア時代のテラコッタ像（大英博物館蔵）。



「天牛」をしとめる英雄。古アカド時代の円筒印章（タマスカス博物館蔵）。

シュ讃歌の一部が終詩として繰り返される。

このような粗筋を物語構成という観点からみれば、全体は大きく次の五つの部分から成り立っていることがわかる。

- (1) ギルガメシュとエンキドゥの出会い (第一―第二の書板)
- (2) 「香柏の森」への遠征 (第三―第五の書板)
- (3) 女神イシュタルと「天牛」 (第六の書板)
- (4) エンキドゥとの死別 (第七―第八の書板)
- (5) 永生探究の旅 (第九―第一一の書板)

これら五つの部分は、シュメル語のギルガメシュ諸伝承のように、それぞれが自己完結的に物語られるのではなく、順を追って前後に連結し、叙事詩の全体を構成する。しかも、出会いと死別という逆の方向をと



下半身は蠍で、鷲の足をもつ蠍人間。中期バビロニア時代の「境界石」の一部 (大英博物館蔵)。

りながらも、ギルガメシュとエンキドゥとの関係をめぐるといふ意味で(1)と(4)が対応し、(2)と(5)とは、目的は異なるが、ギルガメシュの旅立ちを物語るといふ点で重なり合う。また、(1)から(2)にかけて、エンキドゥとの出会いがギルガメシュに「香柏の森」への遠征を促したとすれば、(4)と(5)においては、エンキドゥとの死別がギルガメシュを「不死の生命」探求の旅に赴かせる。要するに、叙事詩は五つの部分を物語の時間に沿って継起させるばかりでなく、前半部(1)―(2)と後半部(4)―(5)とを照応させ、全体を構造化しているのである(各部分の書板の数もこれに対応する)。このような前半部と後半部を切り結ぶのが、上に触れたシュメル語の作品『ギルガメシュ、エンキドゥ、天牛』を取り込んだ(3)の逸話である。叙事詩はこの逸話に、前半部と後半部とを切り結ぶ、全体の構成上きわめて重要な位置を与えたのである*。

このような標準版『ギルガメシュ叙事詩』の全体構成は、古バビロニア版のそれを何らかに引き継いだものである。エンキドゥの死を記す部分を除けば、現在までに発見されている古バビロニア版の諸伝承は、断片的であるにしても、すべての部分にわたっている。

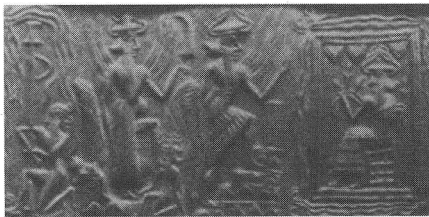
*6 女神の誘惑を拒絶するこの文学的モチーフは、『オデッセイア』のカリュプソーやキルケの件りを思わせる。それは、さらに、上位にある女性の誘惑とその拒絶として、エジプトでは『二人兄弟の物語』に、イス

6 『ギルガメシユ叙事詩』にみる死生観

『ギルガメシユ叙事詩』には、行単位の対句法や語呂合わせなどの表現上の技法がふんだんに用いられ、夢による出来事の予告といった物語技法の特色も指摘できる。また、個々の場面からは、当時の様々な宗教史的、文化史的背景を読み取ることができる。ここでは、しかし、それらには触れない。むしろ、楔形文字文化に生きた人々の思想の一端を垣間見るために、まずは、叙事詩にうかがわれる死生観を取り上げてみよう。^{＊7}

物語によれば、当初、ギルガメシユは一種の英雄的人生観を抱いていた。彼は「香柏の森」への遠征に向かう際、怪物フンババに恐れ、遠征に尻込みするエンキドゥに次のように語っている（古バビロニア版「Y」第四欄五一―五行）。

わが友よ、誰が天に上れるというのか。



太陽神シャマシユの表敬を受ける水と知恵の神エア（右端）。エアはウトナピシュティムに洪水到来を知らせた。古アッカド時代の円筒印章（イラク博物館蔵）。

ラエルではヨセフ物語に、ギリシアではエウリピデス『ヒッポリュトス』他に引き継がれてゆく。この点については、拙論「イシュタルの誘惑——『ギルガメシユ叙事詩』とその周辺——」、聖心女子大

シヤマシユと共に永遠に「住」むのは神のみ。

人間の「生きる」日々は数えられている。^{*8}

彼が成し遂げることはすべて風に過ぎない。

あなたはここにおよんで死を怖れるのか。

あなたの勇猛果敢さは何だったのか。

あなたの前をわたしがゆこう。

あなたは口で叫べばよい、「近づけ、ひるむな」と。

もし斃れたら、わたしはわが名をあげるだろう、

ギルガメシユはかの恐ろしいフワワと戦いを交えたのだ、と。

人間に死は避けられない。ならば、死を怖れず、勇猛果敢に闘い、後世に名を残す
がよい。そうギルガメシユは語っている。じじつ、多くのメソポタミアの王たちは戦
闘におけるみずからの英雄的行為を碑文に刻ませたのである。古バビロニア版に伝え
られるこの人生観は、対応箇所が欠損する標準版（第二欄八行以下）に、そのままのか
たちで残されていないが、標準版にも同様の人生観が披瀝されていたであろうこと
は、エンキドウの次のことばから推測しうる（第四の書板第六欄三六行）。

学キリスト教文化研究所
編『宗教文学の可能性』（春
秋社、二〇〇一年）、一〇五—
一一九頁参照。

*7 上掲拙訳の解説、
三一四—三二〇頁参照。

*8 引用文中の「」
は原文欠損部を、「」は
翻訳上の補いを示す。

戦いがお前の心を燃やせ。死をもともせず、生を生きよ。

ところが、盟友エンキドウの死に直面すると、このようなギルガメシュの英雄的信条はもろくも瓦解する（第九の書板第一欄一—五行）。

ギルガメシュは彼の友エンキドウのため

いたく泣き、荒野をさまよった。

わたしも死ぬのか。

エンキドウのようではない、とでもいうのか。

悲嘆がわが胸に押し寄せた。

わたしは死を怖れ、荒野をさまよう。

死を怖れなかったはずのギルガメシュが、死に脅かされ、死の恐怖のとりことなっている。そして、死の恐怖がギルガメシュに、死に脅かされる生の意味を問わせたのであった。もし生が死によって無意味化されるとすれば、生の意味はどこにあるのか。

彼は、死をこえる生命を求めて、旅に出る。かつて不死の生命を与えられたと言ひ伝えられる「遙かなるウトナピシユティム」を訪ね、死をこえる生命の秘密を聞き出そうとしたのである。

古バビロニア版によれば、「海辺の地」に辿り着いたギルガメシュは「酌婦」シドウリから次のような忠告を聞く（古バビロニア版「M」第三欄一一四行）。

ギルガメシュよ、お前はどこにさまよい行くか。

お前が探し求める生命をお前は見出せまい。

神々が人間を造ったとき、

彼らは人間に死をあてがい、

生命は彼ら自身の手におさめてしまったのだ。

ギルガメシュよ、自分の腹を満たせ。

昼夜、あなた自身を喜ばせよ。

日毎、喜びの宴を繰り広げよ。

昼夜、踊って楽しむがよい。

あなたの衣を清く保つがよい。

あなたの頭〔髪〕を洗い、水を浴びよ。

あなたの手にする子供に眼をかけよ。

あなたの膝で妻が飲ぶようにするがよい。

これが人間の「なすべき」業なのだ。

人間は神々によって死ぬべき存在として定められている。ならば、その限りある人生を享受し、限りあるままに楽しく暮らすこと、それが限りある生を生きる人間の生き方ではないか。人間の有限性を見据えた現世的享樂主義がここに開陳されている。だが、古バビロニア版に残るこのような人生観は、なぜか標準板では削除された（前掲、第一〇の書板の粗筋参照）。標準版において、人間を襲う死の暴力性を指摘し、人間の生は神々によって定められている、と語るのはウトナピシュティムである（第一〇の書板第六欄二三―二五、三八―三九行）。

誰も死を見ることはできない。

誰も死の顔を見ることはできない。

誰も死の声「を聞くことはできない。」

死は怒りのなかで人間をへし折るのだ。

そのような死の脅威のもとにある人間は、どのように積極的な人生を送りうるのか。この点について、ウトナピシュティムは口を閉ざしている。わずかに、本文が破損した部分に、人間は神々を祀ることによって、生存を脅かす悪しき諸力を遠ざけうる、という思想が顔を覗かせるのみである（第一〇の書板第六欄一一―一三行）。これが現世的享楽主義に代わる標準版叙事詩の人生観であつた。標準版の編者がシドウリの現世的享楽主義的発言を削除した理由は、彼が神々への奉仕に人間の生の本質を見る古代メソポタミアの伝統的人間観（それはアッカド語の人間創造神話によく表れている）に立っていただけだと思われる。

いづれにせよ、『ギルガメシユ叙事詩』は、このように、死ぬべき人間の生のあり方を素朴なかたちで読者に提示する。英雄的人生観、永生希求、そして現世的享楽主義（古バビロニア版）もしくは神への奉仕に生きる宗教的人生観がそれである。だが同時に、それらのうち、どれかひとつが絶対化されることはない。読者は、むしろ現実世界における人間の生き方が死の自覚を契機として、順次、相対化されてゆくさまを眼のあたりにするのである。『ギルガメシユ叙事詩』がなにほどか悲観主義的な情調

を帯びるのは、この相対化のゆえである。

もつとも、死ぬことが不可避であるとすれば、人間は死後どうなるのか、という古くて新しい問いは叙事詩において不問に付されている。そこで、新アッシリア時代（前八世紀）、このことに不満を覚えた伝統主義者により、上に簡単に紹介したシムメル語の作品『ギルガメシュ、エンキドゥ、冥界』の後半部が途中までアッカド語に訳され、第一二の書板として叙事詩の末尾に付されたのである。それは、ギルガメシュが冥界に落としたブックとメックを取りに冥界に下り、冥界の模様を見てきたエンキドゥとの間で交わす死者の境遇をめぐる問答であり、次のように締めくくられている。

その霊が供養を受けることのない者を見たか。

見ました。彼は器からこそぎ落した物や棄てられたパンを食べていました。

ここには、手厚い埋葬とその後の供養を施されてはじめて、死者は冥界でやすらぎを得る、というメソポタミアの伝統的な冥界観が開陳されている。^{*}それによって、叙事詩が不問に付した問いに解答を与えようとしたのである。これを付した伝承主義者は、おそらく、第一二の書板の奥付に名が記されたナブ・ズクブ・ケーナである。彼

*9 メソポタミアの伝統的死生観については拙論「古代メソポタミアにおける死生観と死者儀礼」、

はアッシリアの有力な書記の家系に連なる人物であった。

7 友情物語としての『ギルガメシュ叙事詩』

シュメル語のギルガメシュ諸伝承を素材にして、古バビロニア版『ギルガメシュ叙事詩』がまとめられたとき、シュメル語伝承にみられるギルガメシュとエンキドゥとの間の主従関係は一変した。エンキドゥがギルガメシュの友として描き出されたのである。しかも、叙事詩の物語は両者の友情をひとつの軸として展開する。^{*10}

「国の広場で」繰り広げられる両者の格闘が両者の間に深い「友情」を芽生えさせたことは、すでに触れた。その場面を描く本文には、「彼らは接吻し、友情を結んだ」（古バビロニア版「Y」第一欄一九一—二〇行）、また「彼らは抱き合い、「恋人同士」のように、互いに手を「取り合った」（標準板第二の書板第四欄一—三行）と記される。両者の友情は、しかし、似たもの同士の連帯ではなかった。むしろ以後の物語の展開において、しばしば、両者の振舞いは対照的である。総じて、エンキドゥの発言と行動が感情的、無意識的であるのに対し、ギルガメシュのそれはより意志的であり、知的でさえあるよ

日本西アジア考古学会編
『西アジア考古学』第八号
（二〇〇七年）、一一一—一〇頁参照。

*10 上掲拙訳の解説、
三二〇—三二六頁参照。

うにみえる。そして、両者の友情は共働の事業へと導いてゆく。

まずは、怪物フンババ退治である。ギルガメシュは「香柏の森」への遠征に尻込むエンキドゥを鼓舞し、ともに出立する。ところが、フンババの住む「香柏の森」に近づくと連れ、不安にかられるのはギルガメシュの方であり、エンキドゥが彼の夢を「よき兆し」と解いて、ギルガメシュを勇気づけるのである。はたして、二人はフンババを捕らえ、命乞いするフンババを殺害する。ひとつの事業を目指し、不安や懐疑をも率直に披瀝し、互いに鼓舞し合い、支え合う友情がここに描き出される。

その後も二人は協力し、女神イシュタルを「侮辱した」ギルガメシュに制裁として下された「天牛」を撃ち倒す。エンキドゥが「天牛」を押さえ、ギルガメシュがとどめを刺す。ギルガメシュは後に、これらを回顧して、ウルクの人々にこう語っている(第八の書板第八欄一〇―一二行他)。

われらは協力し、山に登った。

天牛を捕まえ、「これを撃ち殺した。」

香柏の森の強者、フンババを滅ぼした。

だが、こうした共働の事業も長くは続かなかつた。両者によるフンババと「天牛」の殺害は、神々の決定により、エンキドウの死をもって償われなければならなかつたからである。みずからの死を予感するエンキドウは、彼を荒野からウルクの町に連れてきた聖娼シヤムハトを呪うが、そのエンキドウに太陽神シヤマシユが友の存在を語つて聞かせる（第七の書板第三欄四一―四三行）。

彼女はよき人物ギルガメシユをお前の朋友とした。

いまや、ギルガメシユはお前の兄弟なる最愛の友。

彼は立派な「死の」寝台にお前を横たえさせよう。

こうしてみずからの死を徐々に受け容れたエンキドウは、その最期に、次のようにギルガメシユに語っている（第七の書板第六欄三一―四行）。

〔死後も〕わたしを思い起こして欲しい。

忘れないでくれ、

わたしが「あなたと共に」歩み続けたことを。

最愛の友の死を予期していたギルガメシユも、現実の死を眼の当たりにして、痛ましい哀悼の叫びをあげる。それは、死んだ友への呼びかけにはじまり、最愛の友の死を悼む激しくも切々とした哀歌である（第八の書板第一欄三行―第二欄一四行）。

わたしはわが友エンキドゥのために泣く。

泣き女のように、いたく泣き叫ぶ。

友の死の衝撃がギルガメシユにそれまでの英雄的死生観を放棄させたことは、すでに述べた。友の死が彼の内に死の恐怖を呼び覚まし、死をこえる生の可能性に彼の眼差しを向けさせたのである。不死の生命を求めて旅に出たギルガメシユは、酌婦シドゥリに、舟師ウルシヤナビに、ウトナピシユティムに、「愛する友エンキドゥ」の死を繰り返して語っている。

『ギルガメシユ叙事詩』は、このように、二人の「英雄」の友情関係を軸に物語を展開させているが、その意図は友情を美化することでも、友の死による友情の限界を描くことでもなかったらう。むしろ、荒野からやって来たエンキドゥという友を得て、

怪物フンババに立ち向かうウルクの王ギルガメシュを描くことによって、あるいはエ
ンキドウの死を契機に永生へのやむことなき憧憬を抱いて旅するギルガメシュを描く
ことによって、叙事詩は人間存在のあり方に深く関わる友情の意義を問うているよう
にみえる。人類の文学史上、おそらく、この叙事詩をもってはじめて、異なる二つの
魂の出会いが友情として主題化されたのであった。それは、友の死を悼む哀切な挽歌
とともに、西方古代の文学にみる友情物語のさがけとして、旧約聖書におけるダビ
デとヨナタンのそれに、ギリシアではパトロクロスに対するアクレウスのそれ（『イー
リアス』第一八書以下）に引き継がれてゆく。これらはアルファベット文字をもって記さ
れたがゆえに、後代に読み継がれることになったが、粘土板に楔形文字で刻まれた『ギ
ルガメシュ叙事詩』は、古代メソポタミア文明の終焉とともに、遺跡に考古学者の鍬
が入るごく最近まで、地中で長い眠りについていたのであった。